

第3部：企画プログラム「史料を読む（2）」

Rhan 3: Rhaglen Fwriadol "Darllen Deunydd Crai"

「ジェラルド・オヴ・ウェールズは どこまでウェールズ人だったのか」

永井 一郎

日本カムライグ学会の連続企画「ギラルドゥス・カンブレンシスを読む」の第2回報告でこのような論題を掲げた理由を最初に説明する必要があるだろう。同学会がギラルドゥス・カンブレンシス（＝ジェラルド・オヴ・ウェールズ）を特に取り上げたのは、彼がその通称の示すようにウェールズ出身で、中世ウェールズを代表する文筆家であると評価されているからである。ウェールズをフィールドとする研究者が集う学会としてはごく自然なテーマ設定である。私もこの点を充分承知している。にもかかわらず、あえてジェラルドはどこまでウェールズ人だったのかという問題提起をするのは、例えば私が日本人であるのと同じ意味で彼がウェールズ人であったといえるのかどうか、一度検討する必要があると考えたからである。近代以降に広まった国籍の観念が中世にはなかったことは言うまでもないが、この点を除いても、以下で述べるようにジェラルドは今日の日本人とは大きく異なる状況や認識をもっていた。

まず、我々が「～人」と判定する際に利用する最も一般的な手がかりは血統であるが、ジェラルドの血統はその4分の1が古いウェールズ王家に属し、残り4分の3はアングロ・ノルマン貴族の家系に由来していた。この割合のみから言えば、彼はウェールズ人よりもむしろイングランドないしフランスの人と呼ぶのがふさわしい。

第2に、ジェラルドはほぼ完全にアングロ・ノルマン貴族の子弟として養育され、加えて高位聖職者となるための教育をイングランドとフランスで受けている。養育はウェールズ南部で行われたが、彼の生活や日常感覚は同時期の一般ウェールズ人とは大きく違っていた。言語も「～人」の判定に際してしばしば重要視されるが、ジェラルドが日常的に使用したのはアングロ・ノルマン(フランス)語であり、ラテン語にも熟達していた。それに対してウェールズ語は知っていたが、堪能であったとは考え難い。少なくとも彼の母語はウェールズ語でなかったのである。

第3に、ジェラルドのもっていた共属意識は複雑であった。彼はしばしば自らウェールズ人と称し、ウェールズに関する知識を誇りとしているが、自分を一般のウェールズ人と同等視することは決してなかった。彼の自覚していた帰属先はアングロ・ノルマン貴族の家系とウェールズの王家であり、その中でも前者が大きな比重を占めていた。著作の中で彼がウェールズ人を自称するのは特別の文脈においてである場合が多い。例えば、イングランドの支配層にウェールズに関する自分の知識を披瀝する際、あるいは、イングランド王とウェールズ南部の支配者たちとの仲介者として自分は重要な存在であると強調する際である。

最後に、ジェラルドの時代にはまだ統一的なウェールズ人認識がほとんど成立していなかった。先祖代々ウェールズに居住し、ウェールズ語を話す人々は多く存在していたが、彼らは自分たちがウェールズ人という1つの民族であるとは考えていたわけではなく、最大限でいっても南ウェールズや北ウェールズをまとまりとする認識しか生まれていなかった。支配者層の中で同じ言語、法をもつウェールズ人であるという統一的共属意識が生まれたのは早くても12世紀中葉、確実な証拠が出てくるのは13世紀になってからである。これはイングランドからの政治的、軍事的な圧力に対抗する努力の中で新しく作り出された認識であった。一般住民の間ではさらに遅く、14世紀以降イングランド王の統治下で差別的な支配を受ける中でウェールズ人という共属意識が広まったのである。

以上から、ジェラルドを単純にウェールズ人と言えないことは明らかであろう。ウェールズ人とみなしうる要素を彼がもっているのは確かだが、それは彼の全てをカバーしているわけではなく、むしろアングロ・ノルマン人としての性格の方が強い。しかし、私はジェラルドをウェールズから切り離して考えるべきだと主張しているのでは決してない。ジェラルドにとってウェールズが決定的重要性をもっていたことは言うまでもない。ただ、ウェールズとの関係を重視するあまりに、私が日本人であるのと同じ意味で彼はウェールズ人であったと無意識に断定し、それを前提として彼の著作を読むのと誤解が発生する可能性が高いという、当然のことを改めて確認したかっただけである。今後連続企画「ギラルドゥス・カンブレシスを読む」を進める際は、取り上げる彼の記述がどのような目的や背景をもち、彼がどの社会に帰属する者として書いているのかを個別に推定した上で議論を展開したいと考えている。